

月刊  
JMITU ティーヌカ



12月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2024 年発行

No.480

# 企業献金禁止を行い国民の声が行き届く本来の民主主義へ

## 企業献金禁止の

### 重要性について

自民党の企業献金問題は、企業が自民党に多額の献金を行うことで、政治家が企業の利益を優先する政策を推進する圧力を受ける可能性があるという問題です。これにより、一般国民の利益が軽視されることが懸念されています。2023年に自民党は、企業や団体から約22億円の献金を受け取っており、これは他の政党と比較しても非常に高額です。このような状況から、企業献金が政治腐敗の温床となり、政治の公正性が損なわれるとの批判が出ています。

この問題は、政治資金規正法の改正をめぐる議論の中で注目

を集めており、今後の法改正の行方が注目されています。企業献金は政治腐敗の温床となる可能性があります。企業が政治家に対して多額の献金を行うことで、政治家はその企業に対して特別な便宜を図る行動を取ることがあります。

これにより、政治腐敗が進行し、政治への信頼が失われることになります。企業献金は選挙の公平性を損なう可能性があります。企業が特定政治家や政党に対して多額の献金を行うことで、その政治家や政党は選挙活動において有利な立場に立つことができます。

お金のある政党はテレビなどでもCMを流すことができ、これにより選挙の公平性が損なわれ、民主主義の根幹が揺らぐことに

なります。

また、大企業が多額の献金を行うことで、その企業の利益が優先される政策が推進され、中小企業や一般国民の利益が軽視され、社会的な不平等が拡大することになります。

企業献金を禁止することで、選挙の公平性を確保し、民主主義の健全な運営を維持することができます。企業献金に頼らず、

市民からの支持を得るために努力することで、政治家は市民の意見や要望をより重視するようになります。

政治が市民のために機能し、民主主義の本来の姿を取り戻せます。

もう一つの問題は、政党助成金です。国民の税金から支払われるものであり、その使途が適切であるかどうかが問題視されています。

2023年には自民党が約8.

5億円の政党助成金を受け取っており、その一部が選挙活動や政治活動に使われていることが報告されています。また、企業献金と政党助成金の二重取りが問題視されており、これが政治腐敗の温床となる可能性があるとの批判されています。さらに、政党助成金の使途が不透明であることから、国民の信頼を失う原因となっています。

特に、選挙活動に使われる資金がどのように使われているかが明確でないため、透明性の向上が求められています。

企業献金禁止、政党助成金の透明化、廃止など、政治の公正性を確保し、政治腐敗を防ぎ、選挙の公平性を維持し、社会的な不平等を是正するために重要です。

労働組合としても、企業献金禁止の実現に向けて積極的に取り組んでいきたいと思っています。



掌編小説

## 街頭インタビュー

仙洞田一彦

いつも通り午後二時ごろ散歩に出た。帰宅予定は午後五時頃。寒くなると暖房をつけていても、体に自然、力が入る。一日家にいると、体の調子が良くない。夜の眠りが浅くなる感じがする。もともと電気代、ガス代を気にしないで部屋を暖めて、薄着でいられればそんなことはないかもしれない。

今にも止まりそうな、ゆっくり歩く散歩でも三時間ほど歩けば、体がほぐれた感じがする。電気、ガスはその間止めておくから、電気代、ガス代の節約にもなる。

日の当たる側を選んで歩く

のだが、今日はいにく、曇り空だ。強風ではないが風もある。マフラーをし、ダウンコートのファスナーも上げて、風が入らないようにした。下着も十日ほど前から、長そで、股引にした。

高級住宅街を通ったりすると、通行人全部が、私なんかより二、三枚薄着ではないかと見える。ダウンのコートなどを着ているのを見かけない。来ている布地が高級で、保温性が高いのではないかと思う。それよりなによりフトコロの温かさが違う。思わずひがみ視線で行き交う人を眺める。今日の散歩コースにはない。いつも通り清流沿いの道を歩く。清流があるわけがない。いい匂いのするかわつぷちを歩く。歳のせいで鼻の性能も

悪くなった。それでも風向きか、何か知らないが、思わず川沿いの道から離れたくなる日もある。鼻だけでなく目も耳も衰えた。

駅に通じる商店街に入る。昔は個人営業の商店がほとんどだったが、今は飲食店でも服飾、小物でもチェーン店が軒を連ねている。

散歩するときは文庫本の短篇集を持って出る。喫茶店に入ってコーヒーを飲みながら、短篇を一つ読むのだ。その喫茶店も個人営業と思われる店は高い。コーヒー豆の値段が上がっているから仕方ないだろう。本当はそういう店に入りたいのだが、入らない。結局チェーン店だ。商店街を駅の方に向かいながら、よく寄る三軒ばかり覗いたがどこも

いっぱいだった。

こういう日は、どこにも寄らないで帰るか、書店で本棚を眺めて時間をつぶし、またその店を覗いてみるかだ。

ぶらぶらと歩き駅前広場に出た。少し風景が違う。見慣れない男たちがいた。四、五人いただろうか。それぞれレビカメラらしきものを持っていた。動きやすそうなブルゾン姿で、中年で見るからに活発そうだ。見ていたら高齢の女性に声を掛けた。すぐそばに交番もあるし、カメラを持っているのが年寄りを狙った詐欺ではないだろう。パトカーのように白黒の車だが、区名が入っている宣伝カーで、詐欺にかからないように高齢者に注意して回っている。それが頭に刷り込まれてしまっ

ているせいか、若い人が高齢者に話し掛けている場面を見ると、すぐに詐欺を連想してしまう。

時間つぶしに駅ビルの書店にでも行こうかと思って歩いていたら、広場の中ほどで、カメラを持っているうちの一人に声を掛けられた。

「……の……という番組ですが……お話を聞かせてください。……お時間、少しいですか」

補聴器をつけていなかったのに、正確には何と声を掛けられたか分からない。テレビ局の名前も、番組名も言ったようだが、なんと言ったか分からない。

以前、知らない人から声を掛けられて、まだ若かった私は「話し掛けるなら、まず自

分の名前を名乗れ」などと言

ったこともあった。今はそんな元氣もないが、相手は名乗った。よく分からなかったから聞き返してもいいのだが、

面倒くさかった。何度も聞き返すと失礼になるように思い、分かったような返事をする。

分かった言葉をつなぎ合わせて推測すると、インタビューしたいということだろう。

急いでどこへ行くという時ではなかったので立ち止まった。

大柄な相手は胸のあたりにカメラを抱えて、こちらにレンズとマイクを向けた。私から見れば、相手は誰でもいい大柄だが、堂々としていた。

「お正月になりますが、どこか旅行にでも行く予定がありますか……いろいろ物価が上がって大変ですが……年金で

生活されているんですか」

駅前の騒音もあって、細切れた質問のように聞こえるが、聞こえないところはやはり推測して答えなければならぬ。

補聴器をしていれば聞こえて、理路整然とした質問していたのかもしれない。聞こえた言葉をつなぎ合わせて、何を聞きたいんだろうかと考えた。

物価が上がり続け、苦しくなっているだろうと思われる年金暮らしの人の実態を、街頭インタビューでつかみ、報道しようというのだろうと思っ

た。「旅行は考えていない。正月もここにいますよ」と答え、年金暮らしの質問には「そうだ」と答えた。

「年金は、いくらぐらいですか」と年金受給額を聞いたが、

それには「答えたくない」と

言った。言いながら、なぜ答えたくないだろうと自問していたが、すぐに答えが出なかった。

「クリスマスは何かご予定は」私は首を横に振った。逆に私が質問した。

「どのくらいの収入を考えて言っているの」

テレビ局の人は、正月旅行もクリスマスもできると思っているんだろうか。クリスマスに家族集まって、プレゼントを交換したりケーキを食べたり、あるいは出かけてちょっと豪華な食事をする。正月にはどこか温泉につかりに行くと思っているのだろうか。孫たちにお年玉を上げる。

この辺を歩いている人たちは、そんなにたくさん年金を

もらっているのだろうか。そのためにはどのくらいの年金を貰ったらできると考えているのだろうかと思ったのだ。さらに私は言った。

「年金の枠内で生活しているから、できないとわかってる旅行など、はじめから考えていないよ。クリスマスだってそうだよ」

と、言った。すぐに別の考えが頭に浮かんだ。いや、違う。この辺を歩いている人たちは貧しく、クリスマスも正月もないはずと見込んで、インタビューの場をここに選んだのだ。でも、それは黙っていた。次の質問が出てこない。私も何を答えてよいのか分からなくなった。

「じゃ、」  
と言って、片手を上げて、

駅ビルに入って行った。書店は上にある。エスカレーターで運ばれながら考えた。

話し掛けて、止めていたのは高齢者ばかりだったようだから、物価と年金生活の問題だろうな。インタビュー側はどんな回答を期待していたんだろうと考えた。

「物価が上がって、何時もしていた正月旅行なんて、もう考えられない」

そう答えれば、もしかするとテレビに映ったかな、などと考えた。

「いままで、クリスマスに集まって、みんなでどんちゃん騒ぎをしていたけど、場所代、酒代みんな値上げでできなくなった」

と答えればよかったのかなあ。そうすれば私の顔が電波

に乗って、全国に広がっていくのかな。

旅行もできない、クリスマスもできない。そんな生活が二十年近くも続いている。物価が上がれば、できないことがより遠くなって、さらに手が届かなくなったただけだ。

いや待てよ……

そう考えているうちに書店のある階を過ぎてしまった。下りのエスカレーターに移りながら、閃いた。今日のインタビューは「苦しいでしょう」「貧しいでしょう」と念を押されているようだが、私はあまりそれを感じていないのだ。下りのエスカレーターに足を乗せた。

本があふれ、カビも生え、そういう部屋に長いこと暮らしていると、不潔だとか何だ

とか、何も感じなくなってしまう。旅行に行くなどもってのほかと思って長いこと暮らしていると、脳裏から「旅行」という言葉がなくなってしまうのだ。旅行に行くという「欲」もなくなってしまう。「物価が上がって苦しいでしょう」というけど、苦しいのは当然と考えているから……つまり、抵抗する気力をなくしている。「欲」などとも縁が切れている。苦しいという声すら上げられない。つまり、貧困以前というか、それ以下というところか……つまりその、ちよつとそのあたりを補足説明しないといけない。

一階に着いた。ちよこちよこと急ぎ足で駅前広場に出て見たが、放送局の人達はすでにいなくなっていた。